Point-Light Walker 図の視知覚特性 (5)

歌舞伎役者の足の運びの場合

鷲見成正

(慶應義塾大学)

キーワード: バイオロジカル・モーション・動作知覚・動作表現

Identification of Human Gait from Point-Lights Display of Walker

Shigemasa SUMI

(Keio University)

Key words: Biological Motion, Perception and Action, Artistic Expression

目 的

日本の伝統芸能である歌舞伎と能の動作表現にみられる特徴の一端を演者の歩行動作を通して調べる。

人間の身体は骨格により構成されているので、片足を持ち上げて前方に踏み出す歩行動作には重心の移動が必要となる。この動作は身体各部位間の協応関係に基づいて実行されるが、協応の形態‘かたち’については、基本においてすべてに共通するものの、人それぞれで微妙に異なる。この協応形態の違いが、荒々しさ・しとやかさ・静寂・優雅・滑稽・悲哀といった動作に伴うさまざまな感情表現を生み出すのである。歌舞音曲の芸能に携わる演者はきびしい修業を通して洗練された動作表現の技を身につけ、その優れた伎藝の美が観る者の心を奪う。わが国古典芸能の能・狂言は極限にまで簡略化に徹した簡素芸術の粋として知られ、歌舞伎はさまざまな手法を駆使して表現の豊かさを身につけ芸の道を極めんとする。

歩行者の身体関節部位に取り付けた光点群 PLW(Point-Lights Walker)の動きを基に歩行者の知覚的動作特性を追究するバイオロジカル・モーション研究は、その特徴が「肩-足」間の協応関係において特に強く現われることを確かめてきた(Sumi, 2000;2007)。この点に注目し、歌舞伎役者の動作表現特性を能楽師との比較において検討してみることとする。

方 法

調査対象に NHK 映像「日本の芸能」から九世坂東三津五郎氏の「釣女」と福王茂十郎氏の「観世流・石橋」の各一場面を選んだ。前者は歌舞伎の、後者は能・狂言の歩行動作特性がよく表現されていると考えたからである。演者の1ステップ(最初の姿勢から次の姿勢に移るまでの歩行動作)を示す映像をPCソフト(Adobe Premiere)でフレーム化し(約30コマ/秒)、同じコマ画面内での肩(左右いずれか)の位置(X,Y)と、それとは反対側の足(つま先部分)の位置(X,Y)をそれぞれピクセル単位で測定した。得られた数値を標準化して基礎データとし、1ステップ中に生じた肩-足協応関係を相関図(横軸に肩のY値、縦軸に足のY値をとった散布図)で示した。

結 果 と 考 察

図1(上段左図)は歌舞伎演者の肩-足の変位を示したものである。持ち上げられた肩が下がり始め再び持ち上げられるまでの1ステップの経緯を表した。横軸のコマNo. に対する肩(左)と足(右)の各Y値(上下方向の位置変化)は対称的な経過をたどる。詳しくは、肩が下降を始めてから少し遅れて足は動き出し、一気に頂点まで上昇する。その後やや速度を緩めて床面まで下降する。上昇は素早く下降は緩やかである。一方肩は逆に下降した後には上昇するが、緩やかな経過をたどってから足の運動と連動して次のステップへと進む。この変化を横軸(肩値)縦軸(足値)の散布図でみると(図1上段右

図)、全体は負の相関傾向にあり、肩の上昇(下降)は足の下降(上昇)を伴う。ただし肩-足間の変位の経過に“ずれ”があるため、肩値が上昇して(図では横軸右方向)頂点に至る部分で転換部を生じる。この肩-足間に生じる変位のわずかな“ずれ”は動作を際立たせるのに重要で、いわゆる「粋」に関わるものと思われる。図1(下段左図)は能楽師の肩-足位置の変位経過を示したもので、その様相は歌舞伎の場合と大きく異なる。肩と足の動きに対称性は認められず、肩の変位を示すY値は全体として平坦に推移する。一方足の変位を示すY値は、床面を滑らかに移動する部分と急速に上下する部分とに分かれる。これらを図1(下段右図)の散布図で見ると、「肩-足」間変動の結びつきはきわめて弱く、肩の動きに呼応して足が動くという両者間の協応関係は認め難い。能歩行における足(つま先-かかと)の動きの特徴については前回の77回大会で考察した。すなわち、かかたが持ち上げられた後に床面を滑らせるようにして前方へ足が運ばれ、つま先が鋭く上下する。かかととつま先の動きは急峻で厳しく、肩-足間の協応性は極端に押さえられている。一方今回確かめられた歌舞伎の場合には、肩-足の協応性は緊密で、演者は両者を十分に働かして華麗な演技を表現している。この違いは興味深い。一方は動作範囲を狭めてより深く綿密に掘り下げる方向に進み、一方は動きの範囲を広めてより多くの動作の豊かさを求める方向をとる。以上の結果から、能は「足」の動作表現の芸術であり、歌舞伎は「肩」の動作表現の芸術であることを知り得た。

図1. 歌舞伎(上段)と能(下段)の演者の動作解析図

参考文献

- Sumi, S. (2000) *Swiss J. Psychol.*, 59, 126-132. Sumi, S. (2007) *Studies in Perception and Action: IX.* LEA., Pp. 201-204.